

おわりに

小学校の頃、私にはA君という同級生がいて、彼はさまざまな問題を抱えていました。今考えれば、彼は難しい家庭環境に育っており、それが彼の行動に影響を与えていたように思います。

A君は、学級の仲間に入ることができませんでした。それは仲間はずれというよりは、A君自身が学級の中に入ると立ちすくんでしまい、自ら身を引くという状態に近かったように思います。当時のクラスメイトは最初から彼を拒否していたわけではありませんでした。むしろ当初は仲良くしようとしていたように記憶しています。それでも何も話さず仲間に入ってこようとしないA君にいらだち、ある友人たちはあからさまに彼を殴ったりバカにしたりしました。多くの友人たちは声もかけなくなっていました。

それでもA君は、集団の中には入らないものの、集団からちょっと離れたところにおいて、いつもこっちを見ていました。私はそんなA君を見て「きっと本当は仲間に入りたいんだ」と思って積極的に声をかけ続けました。

そんなある日、A君は「家では話をする」ということを聞きました。私と友人数人は「家でなら話せるかな」と、彼の家まで行きました。彼の家近づくと、学校では聞いたことのないA君の大きな声が聞こえてきます。しかし私たちが近づくと彼は再び一切の声を出さなくなったのです。こんなことが何回か繰り返されました。

こういうA君に対して私は次第に怒りを感じ、バカにし、殴ったこともありました。今思えば、彼は選択性緘黙症であり、近づいてくる私たちを脅威としか感じていなかったのでしょう。しかし当時の私にはそんなことは当然わかりません。理解はできないし、どうすればいいのかさっぱりわからない。妥当な「解釈」も適切な「反応検索」もできませんでした。

私にも「いじめられた」体験と「いじめた」体験があります。どちらも思い出した

くない記憶ですが、この「いじめた」記憶は、「A君は今頃どうしているのだろうか」「あのときの記憶を彼は処理できているのだろうか」という苦い思いとなって今も心を刺します。

人は誰もが弱さと未熟さを抱えて生きています。その弱さと未熟さが「いじめ」として現れたとき、いじめ被害者といじめ加害者が生まれます。その両者が「いじめ」によってさらに傷を深めていくのです。

私たちの役割は、このようないじめ被害者もいじめ加害者も生じさせないこと、つまりは「**いじめ自体から子どもを守る**」ことだと思います。そのために、彼らの弱さと未熟さに共感しつつ、成長を支えることが求められているのではないのでしょうか。

最後になりましたが、ほんの森出版の兼弘陽子さん、小林敏史さん、いつもいろいろお世話になります。テープ起こしをしてくれたゼミの宮村悠さん、文献一覧をつくってくれた山崎千穂さん、いろいろチェックしてくれた博士課程の山崎茜さん、長江綾子さん、枝廣和憲君、ありがとう。

本文の執筆に協力してくださった昔からの同志、県立広島大学の金山健一先生、アセスの分析に協力してくださった山口大学の沖林洋平先生、この書を著すきっかけとなった卒業生の松瀬明香先生、ネットいじめの研究を一緒にした同じく卒業生の坂牧由貴先生、いじめ研究に邁進している博士課程の中村孝君、ありがとう。これからも一緒に頑張ろう。

2013年5月

栗原 慎二